

## 小屋番のひとり言

山 口 孝（涸沢ヒュッテ）

涸沢に通い始めて早50余年がたち、あっとゆう間の小屋番人生だったなあと痛感する今日この頃です。

中学3年生の夏休みにおぼが経営していたヒュッテに遊びに行き、雪溪の上でそり遊びをしたり、フカスの岩小屋へおじゃましたりと涸沢の中であそんできました。その後、高校、大学と休みのたびに涸沢へお手伝い？（おじゃま虫）に行き、小屋番として山に入ったのは1972年（札幌オリンピック）で、それ以来、ずっとヒュッテで何とか働いてきました。当時の親分こと、小林銀一さんはとても厳しい人で、朝から晩までずっと怒られっぱなしで仕事をしてきました。毎日、生きてゆくのがやっとの人生だったと思いますが、どうせ生きてゆくなら楽しく生きてゆこうと気持ちがあめばえたのはその時期だったようです。

ヘリのない時代は毎日がボッカの明け暮れでした。雨がふろうと槍がふろうと、関係なしに連日、横尾まで下ってヒュッテまで食料をかつぎ上げるのが男衆の日課でした。とにかくきついボッカでしたので、横尾への下りの時は親方の替歌を歌いながらウサを晴らしながら歩いてました。連日のボッカをこなしているうちに体力がつき、山を飛んで歩けるようになり、レスキュー現場も背負子をかっいですっとなで行きました。まさに体力勝負の小屋番生活でした。

山に登る時はいつも背負子（手作り）をかっいでいたので周りの登山者のザックをみて、いつかは俺もザック一つで山歩きしたいなとうらやましくみておりました。

最近では山小屋の荷上げはほとんどがヘリ輸送とな

り、とても便利になり現代ではヘリなしでは山小屋経営は不可能という時代になってきました。まさにヘリ様様です。

登山者の様子を昔と比べて見てみます。

40年ほど前の登山者は社会人、学生も含めていわゆる「山や」と呼ばれている気合の入った人たちが主流だったと思います。ちょっとしたケガや捻挫程度は人に言うのが恥ずかしくて怪我を隠して山を下山していました。「山や」失格だと言われるのがいやで、ちょっとしたプライドを持っていたのかな。当時は涸沢のテント場には夏休み中ずっとテントを張って滝谷や屏風岩、前穂北尾根にとりついている山やもいっぱいいました。毎日、彼らと顔を合わせ



ているうちに仲良くなり、ボッカ、レスキューの手伝いもしてくれるようになりました。

夕方になると、どこかの女子大ワングルのかわいい歌声がテント場から聞こえ、「いつかある日」、「あざみの歌」、「山小屋の灯」などさわやかに歌っていました。女の子の足元はほとんどがキャラバンシューズだったと記憶しています。

最近の山ブームの一番の要素は山小屋のトイレの改善があげられます。快適で明るく、使い易いトイレは山ガールはじめ女性達が気楽に山を楽しめるようになったようです。

多くの人達が山を楽しむことはとても素晴らしいことです。受け入れてゆく我々小屋番は、訪れてくる登山者を色んな意味であたたかく迎え入れてあげたいと思います。「備えあれば憂いなし」、「注意一秒、ケガ一生」をモットーに山を楽しんでいただければ幸いです。